

書評

鄭大均著『隣国の発見—日韓併合期に 日本人は何を見たか』をめぐりて

林 和人 (葡萄農家)

『隣国の発見』に就き直ちに語ることは控へ、少しく鄭大均氏作品との邂逅とその思出を述べてみたい。

私が某日、最寄りの書店に行き、偶々書棚から引出し手にしたのは、実は『在日韓国人の終焉』(文春新書、平成13年4月20日、第一刷発行)であつた。而も通読したのは平成16年(2004年)11月14日。その当時の事は既に忘却の淵に沈みつつあるが、何か日韓関係に終始止み難い罵詈雑言が飛び交つてゐたと記憶してゐる。現今に至つてさへ沙汰止みにはならぬままである。複雑奇怪な迷路に紛れ込み八方塞り、頭痛に悩まされてゐた。私の凡頭では解決出来さうにない、重苦しい闇に襲はれてゐたと言つて可いのであらうか。

そのやうな折に遭遇したのが、此の『在日韓国人の終焉』で、鄭大均と云ふ名前も意識し覚えたのである。大均氏に語つてもらふことにしよう。

韓国には漠然と四年ほどの滞在とを考えていたが、二年目に結婚。五年目に子どもが生まれ、結局は三十代から四十代半ばまでの十四年間を、釜山^{プサン}や大邱^{テグ}といった慶尚道^{キョンサンド}の町で過ごした。韓国での生活で得たものは大きい。この間に、私は家族を得るとともに新しい研究テーマを得、人生観や世界観を修正するとともに、いくつかのあたらしい行動様式を身につけることができた。(6頁)

韓国滞在十四年は、短かいと云へるだらうか。否、むしろ長いのではないか。その間、結婚され一子をも儲けてゐるのである。韓国通の黒田勝弘氏と較べれば短期間かも知れぬが、滞韓六年の古田博司氏に比すれば長いと謂へやう。その実地見聞で得た新しい発見は数限りなくあつたに違ひない。

この体験をふまへての在日韓国人として自己と他の在日との関係へと、論考が展開してゆくのである。

在日韓国人は帰化が便宜を与えてくれることを知っているが、それがタブーに触れることも知っているのであり、それでも決行するという場合には、親不孝や友人・知人の喪失、あるいは民族組織からの誹謗や批判という代価を覚悟しなければならない。(70頁)

何ゆゑ、在日韓国人が日本帰化に躊躇するのか、それは血縁主義による抑止力が働いてゐるからでらう、と。かう記されながら、鄭大均氏は敢へて、「在日韓国人の終焉」と

断じてゐる。私はその言に勁く撃たれ、これは正しく、肉を切らせて骨を斬る、血潮迸るに等しい行為と私は解し、親しみ(?)さへ覚えたのである。

この『在日韓国人の終焉』通読後、『在日・強制連行の神話』『在日の耐えられない軽さ』へと私は読み継ぎ、比較文化史家の平川祐弘氏講演後の立食会に鄭大均氏のお姿を見掛け、お声をかけたのである。氏の著作の短評(?)を恐らくお話したのではないだろうか。

新刊の筑摩選書『隣国の発見一日韓併合期に日本人は何を見たか』を読み進める中で、故渡辺一夫が時々引用するポール・ヴァレリーの「後退りしながら未来へ這入つてゆく」、さらに島田謹二著『華麗島文学志—日本詩人の台湾体験』のその「あとがき」(平川祐弘著)を雑記帖に書き留めてゐる。

私どもは過去の歴史の産物である植民地主義を是認するものではない。しかしだからといって過去を今日的な価値基準でもって裁断することはしたくない。歴史的なドキュメントはそれをありしがままに復元して提出し、判断は読者諸賢におまかせすることにいたしたい。

此の『隣国の発見一日韓併合期に日本人は何を見たか』卒読には大部日子を要してしまつた。葡萄づくりの一百姓の私は四月から九月上旬の間、猫の手も借りたいほどの繁忙期に当り、前五時から夕七時近くまで畑に居り、読書の時は朝五時前の一時間足らず。しかし遅読の上に健忘症、頁をすゝめることはなかなかできぬのである。

その「序」の巻頭を繙いてみる。

一九一〇年から一九四五年までの三五年間、朝鮮は日本帝国の一部を構成していた。本書は主にこの時代に異邦人として朝鮮で暮らしていた日本人が書き残したエッセイ(随筆)や日記を短い解説とともに紹介するものである。

『在日韓国人の終焉』の頃の鄭大均氏は、ある面で己をも含む在日韓国人に激烈なまでの批判を向けてゐたが、『隣国の発見…』は台風一過後の静かな一夕と云ふより、シトシト降る春雨、夏の終りを告げる秋雨を思はせる落ち着いた研究書である。舞台上の主役は他者に任せ、むしろ端役、或いは観客?に徹してをられるのである。

「序」には『隣国の発見…』を書かざるを得なかつた、著者の熱き思ひが綴られてゐるのである。

日本統治期(日韓併合期)が朝鮮の街や人や文化に与えた影響は今日私たちが漠然と考えるよりはるかに根本的である。野山の風景や、街の風景が変わつたというだけではない。朝鮮全土に鉄道や道路、電信・電話といったインフラが整備され、学校や病院が建設され、また法的規範や私有財産制度がもたらされたというだけでもない。

さらに産業の近代化、日本語の押しつけ?によるバイリンガルの朝鮮人の発生と近代語としての朝鮮語の産出、身分制度(両班・常民・奴婢)の解体、新女性の誕生、消費文化量産等、「原初的欲望」(血縁主義・祖先崇拜)と「合理的欲望」、それは朝鮮の「飛躍や

混乱の序章」「変化の時代」の到来を意味したと、鄭大均氏は敢へて定義づけるのである。

この最新版『隣国の発見…』に至るまでの鄭大均氏著作を読み漁る中で、一外様読者の私が感じてみたことは、時代の主流思潮に対するその懐疑・批判の眼を常に堅持されてゐる、と云ふことであつた。

近年韓国では日本統治期を北朝鮮式に「日帝強占期」などと呼んで、その犠牲者性や抵抗性を一点の曇りもなく語るという態度が流行であるが、それは、なによりもそれによって自己の尊厳が傷つけられたと感じる少数者がいないからであり、もしこの国に、隣国の在日コリアンに匹敵するようなにぎやかな少数者がいてくれたら、隣国を悪魔化する歴史をかくも無邪気に語り続けるという事態を想像することはできない。

これを言い換えると、かつての異邦人である日本人が書き残したものを、これまではその「侵略者性」や「植民者性」のゆえに無視し、遠ざけてきたのだが、これからはむしろその「異邦人性」や「少数者性」のゆえに注目すべきではないのか。彼らは朝鮮に変化をもたらした張本人であつたが、同時にこの時代の朝鮮の生活者であり、観察者であり、外部の目を持った少数者であり、今日の韓国に欠けている視点や記憶を提供してくれる重要な証言者であり得る人々である。

「第一章 朝鮮の山河」の冒頭が、谷崎潤一郎「朝鮮雑感」の引用から始められたのが嬉しい。私は七十代半ばに近い者であるが、遅きに逸した一読者として、谷崎の小説・随筆を齧り始めたのである。三十台で谷崎潤一郎全集を読破したO氏の誘惑に負け繻くやうになつたのだが、O氏は小説第一主義、他方私はその随筆に魅せられてゐるのである。その谷崎が第一章の巻頭を飾つてゐる。

描写力の最たる谷崎の文章をあれこれ言ふ前に、心を静め味ひ愉しむべきである。谷崎の感動がストレートに伝つてくる。その印象鮮明な文面を素直に咀嚼した方がどれだけ良いかしのれない。一九一八年の秋、谷崎は釜山の港に到着、その印象を綴つてゐる。

港に着いて、町のうしろに聳^{そび}えて居る丘の上を、真白な服を着た朝鮮人が鮮やかな秋の朝の日光にくつきりと照らし出されながら、腰^{かが}を屈めつつ悠々と歩いて行く姿を見た時には、一と晩のうちに自分は幼い子供になつて、フェアリー・ランドへ連れて来られたのではないかというような心地がした。(略)

釜山から京城までの汽車の沿道が又非常に景色がいい。漢江の水は空と同じように透き徹って殆んど翡翠^{ひすい}を溶かしたように真青である。ところどころの農家の屋根に干してある唐がらしが日に反射して珊瑚^{さんご}の如く紅く光^{かが}って居る。いや、実際は珊瑚よりももっとずっと紅く、いかにも人工でてかてかと研^{みが}き立てたように輝^{より}いて居る。レールの両側に植^さわっているアカシヤの並樹、コスモスの花、楊柳^{ようりゅう}の枝、百姓家の土塀、それ等の色彩^{さいしき}の冴^さえ冴^さえとした調子は、到底油絵では写すことの出きない、純然たる日本画の絵の具の色である。

京城へ向ふ列車の窓外の風景を細大漏らさず動画を眺めるやうに描写、その色彩が眼前に迫つて来る。谷崎潤一郎後には有名無名の人々が、朝鮮半島への温かな眼差しを以

て丹念に共感をこめ書き記してあるのである。

荻野由之(歴史学者・国文学者)、鶴見祐輔(官僚・政治家)、中根千枝(文化人類学)、永田秀次郎(官僚・政治家)、新木正之介(英文学者)、難波専太郎(美術評論家)、本間九介、泉靖一(人類学者)、野口遵(チッソ株式会社創業者)、竹中要(生物学者)、植木秀幹(水原高等農林専門学校教授)、宮城道雄(箏曲家)、原象一郎(法制局参事官)、喜田貞吉(歴史学者)、今和次郎(建築学者・民俗学者)、市河三喜(英語学の権威)、内田恵太郎(メンタイ・明太・スケトウダラ研究者)、浅川伯教(李朝白磁の美の発見者)、浅川巧(カラ松、五葉松発芽・養苗研究者)、柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司(民芸運動家)等は、第一章「朝鮮の山河」と第二章「隣国の発見」に収められてゐる。朝鮮とその人々を肯定的に眺め、新たな発見とその驚きを記し留めてあるのである。

第三章「もう一つの眺め」とは「非好感の眺め」を収録したものであるが、この眺めを敢へて掲載された鄭大均氏の真摯で公正な姿勢を尊く思ふのである。そして第四章「京城の歩く人」の安倍能成、「旅する科学者」挾間文一の二人へと収斂してゆくのである。

安倍能成は一九二六年、四十二歳の時、京城帝国大学教授として赴任、母校の一高校長に迎へられる十五年間、京城と東京の季節的往還を繰り返しながら、『権域抄』などの朝鮮にまつはる印象的で詳細なエッセイを遺してゐる。樹木草花への温かな眼差し、京城での春の訪づれを丹念に描写してゐる。

…京城に春がおとずれ始めるのは、まず三月の半ば過ぎからであろう。そうして春を魁ける連翹や玄海躑躅が咲き始めるのはまず四月の上旬からであろう。この玄海躑躅は九州の一部や対馬などにはあるそうだけれども、私の見たのは朝鮮が初めてである。内地の多くの躑躅は葉が出て後、その絢爛な花色を初夏のまばゆい日光に輝かすが、これはまた葉の出ぬうち日の光のやっとな暖かくなって来始めたところに、つつましいその紫をおびたやや薄い紅の花をつけるのである。今この大学の医学部のある所は昔の王宮の跡だと聞かす、その構内の回春園の躑躅は私の京城でも最も好む眺めの一つである。この殆ど人に忘れられたような廃園の、大きな黒い枝をした櫟がまだ茶色の若芽を出さず、去年の枯葉を堆く散らした下から、緑草が僅かに萌え出でようとし、松の葉はまだ黒ずんで冬のくすぶりから蘇り切らないような、春まだ浅いこの一囲いの庭へ、斜面に層々と重なって、ある所は密にある所は疎らに、それが日の光の受け方によってあるいは明るく白味をおび、あるいははくらく紫色にかげり、様々の濃淡と、いうにいわれぬニュアンスとを現わしているこの躑躅の花は、実際いつまで見ても飽くということを知らない。

一本の躑躅さへ軽視せず、魂をこめて細密に描写する安倍能成の情感あふれる観察眼、それは躑躅に限らず、さらにそのひろがりか予測できるのである。

「京城は美しい都である」と語りながら、安倍能成はその景観を眼をこらして眺め、北漢山の巍峨たる山容、西北の方義州街道に臨む仁王山、三角形の白岳、駱駝山の眺望、安倍の寓居から朝鮮神宮への南山の散歩時におけるその温かな眼差し。

さらに「朝鮮の名苑」に至つては、朝鮮と内地(日本)、西洋との比較が語られ、その独自の特色が記されてゐる。昌徳宮後苑の秘園、天長節に遊園会のある景福宮の後園、大

院君の別荘の石坡亭、大学医学部構内の回春園などの特徴ある風情を淡々と述べてゐる。

総じてこれ等の庭園に通じて、内地の庭園の如く細かな人工が加えられていない。大体は自然の地形をそのままにし、そこに池を穿ち道をつけ、亭榭宮殿等を配したに過ぎず、その樹木に至っても、殆ど盆栽的な剪裁が加えられていない。またそれを普通の西洋の宮苑に比べると、全体の組織が幾何学的設計の下に出来ているということが殆どない。西洋の庭園は全体の設計が人工的であって、その細部に至っては余り人口を加えず自然に任ずるという傾向を有し、日本の庭園は自然を模するという趣旨によって、狭き地域の中に自然を盛ろうとする為に、却って非常に自然を概して箱庭の繊巧に墮する弊がないとしない。朝鮮の庭は西洋の意味に於いても日本の意味に於いても人工的要素が少なく、自然的要素が多いといえるであろう。

この一節は安倍能成の朝鮮発見の新しい視点とも云へるもので、その捕はれない姿勢が貴くすらある。文化輸入にわたる日本人と朝鮮人の相違を語るその把握力は、日韓併合期に於ける見方としては本質をついた比較文化論に等しく、その先見の眼は意義深いと言へるであらう。

彼等の生活の中には勿論多分の西洋的要素がはいつて居る。然も、此等の西洋要素が一般的に日本人の生活を支配する勢が、益々増大する一方に、他方個々人の生活について見ると、そこに在来の日本の生活が意外に根強く巢を食って居る事実を発見せざるを得ないのである。しかも我々の有するものの内で、朝鮮人が我々から学び取るところのものは、その日本的なものではなくして西洋的なものである。

右の文面には鋭いアイロニーがこめられ、朝鮮併合に湧き立つ日本国人の熱をさますにたる冷水と言へないこともない。

さらに、「種詩く人」であつた浅川巧への安倍の惜別の辞は、その人柄を浮き立たせてくれる魂の叫び声と言へるかも知れぬ。

巧さんは官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく、その人間の力だけで露堂々と生きぬいて行った。(略)

巧さんは確かに一種の風格を具えた人である。丈は高くなく風采も揚がらなかった。卒然としてこれに接すると、如何にもぶっきらぼうで無愛想らしく、わるくいえば一寸不逞鮮人らしい所もあつた。しかし親しんでゆく中で、その天真の人のよさは直ちに感ぜられ、その無邪気なる笑とその巧まぬユーモアとは、求めずして一座を暖かにする所があつた。

浅川巧は大正三年五月、二十四歳で朝鮮に渡り、総督府山林部に属し、以降十八年朝鮮と深く関わり、その死の直前までその地位は判任官の技手、月給は五級(中等学校に初めて赴任する者がもらふ俸給)であつた由。

浅川巧の仕事は種を蒔いて朝鮮の山を青くすると云つた遠大の仕事であつた外、浅川

は『朝鮮の膳』や『朝鮮陶磁名考』など、朝鮮の生活と文化の詳細な研究を後世に遺してゐる由である。

さらに鄭大均氏の『隣国の発見』は、私の全く知らなかつた「旅する科学者」の挾間文一(1898-1946)へ向ふのである。大均氏は挾間の『朝鮮の自然と生活』を引用されてゐる。その心の変化がゆるやかに語られてゐる。

朝鮮の風物が、新来の人に、先ず最初に特別^{すてき}素適な印象を与えると主張する事は出来ない。ある邑に、内地から招聘された官吏が、停車場から最初の通りを市場の所まで来て、そのまま黙って引き返し、次の列車で永久にこの邑を立ち去つたとさえ言われている。この話が真実であるか、意地悪い風評であるか、私は知らないけれども、十年前の四月十六日、私が初めて朝鮮の地を踏んだ時の第一印象も、私の暗い気分を明るくするには少しも役立たなかつた事を白状しなければならぬ。汽車の窓から移り行く沿線の田園風景を眺めた時、若草の漸く^{ようや}萌え出た禿山の麓に、ひれ伏さんばかりに、低く落ちぶれている粗末な藁^{わら}屋根の茅屋が点在している貧弱な春景色に、一種の寂寞の念さえ感じたのであった。

しかし、京城に居を構えて、折々田舎を歩いているうちに、いつしか私はその風物の中に親しみを感じ始めた。(略)最初に目を付けたのが、路傍の雑草であった。内地では植物等には何等の興味も持たなかつた私であったが、朝鮮では妙に雑草に魅力を感じ、その名称や分布を調べている間に、今度は偶々朝鮮には秋に出る蛍のいる事が分かつて、研究はこの方面に脱線して、その発光現象に関し、二、三の専門の論文をも発表した。(略)研究が進展するにつれて、朝鮮の生物学にはまだ未開拓の領域が少なからずある事に気付いて、興味は募る一方であった。

医師である挾間文一は鉾山の診療や衛生指導に赴き、全朝鮮の隅々まで足跡を残したのである。朝鮮宿に泊り、朝鮮食を食ひ、各地の伝説や民謡を聞き、方言を覚えてゐる。

私は挾間文一への鄭大均氏の熱き思ひとその功績への高い評価、やはり何としても掘り出さねばならぬ「旅する科学者」であつたのであらう。

日韓併合期を支配被支配と云ふふう^うにスタティックに考察するのではなく、一種のダイナミック的視点観点に立ち推察するのが大切なのであらう。朝鮮と日本との交流がこの期になされ、数多くの日本人が朝鮮の地を踏みしめた筈である。

私は既に記したやうに、一外様讀書子に外ならず、決して専門家ではなく、学ぶ事のみ多い者でしかない。

(筑摩書房、2023年刊)